

茶の花に朝日のとどく指とどく

田中裕明（『夜の客人』）

茶の花の白に朝日が届く瞬間を思うと、清浄だ。その後につづく「指とどく」は、子供のそれのような気配がある。或いは、何か、人でないものが、スローモーション映像で近づいてくる直前のような、そんな気配がある。この小さなリフレイン「朝日のとどく指とどく」は私に別の句を想起させる。

渚にて金澤のこと菊のこと（『花間一壺』）

どちらも小さなリフレインである。そして二度目に登場するものが、尋常ではない。

「渚にて金澤のこと」までは、海辺にいる人物を思えなくはないけれど、そこに登場する「菊のこと」によって、次元を異にするような深いスリットが生まれる。この下五によって、これは人物の心中などではなく、句自体が一つの美そのものになる。

「茶の花に朝日のとどく」も、ここまではごく普通の自然詠の姿をしているけれど、下五によって、無垢な世界があらわれる。

田中裕明の不思議なリフレイン。それは決して等価のものとの並列ではなく、取り合わせの手法にある切れの手触りが秘められている。それがちっとも手柄顔をしていない。あまりにさりげない簡単なことばで示されているので、つい気持ちよくなって見過ごしてしまうのだけれども。